



教育学部准教授
赤木 和重

あかぎかずしげ
博士(学術)
専門分野は、発達臨床心理学(乳幼児、障害児の発達臨床)

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
▶ <http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

右図/地域の学校に出かけて、現場の先生と一緒に
よりよい支援について考えています。



自閉症の子どものころによりそい、 新たな支援の可能性を切り拓く。

これまで、自閉症児の研究は“できない”ことに注目し
障害の解明や支援方法を考えていくものが主流でした。
しかし、教育学部では自閉症児のできること、
教えられるだけでなく、“教える存在”としての姿を見つけて
自閉症児の世界を豊かにする支援を目指しています。



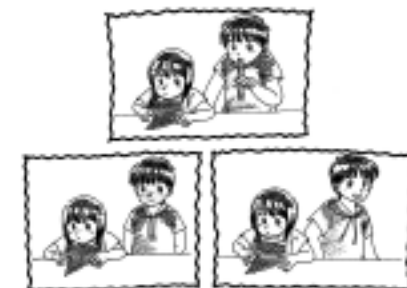
©戸部けいこ(フォアミセス)
自閉症の子供について描かれた
「光とともに」という漫画。(図1)

自閉症の子どもの心理を研究

私は、発達心理学を専門にしており、特に自閉症の子どもの心理について研究しています。近年、自閉症をテーマにしたテレビドラマや漫画が増えてきましたので(図1)、自閉症という言葉を目にしたことがある方も多いかと思います。自閉症は、コミュニケーションに生まれつき困難がある障害です。例えば、赤ちゃんは、通常7,8か月ころになると、イナイナイパーをされることを期待して喜び、お母さんがいなくなると不安になって後追いはじめます。ところが、自閉症の子どもたちは、このような行動がみられにくく、一人でコマースのフレーズを繰り返したり、ミニカーのタイヤがまわるのをずっと



円板をはめることができなくて困っている大人に対して、2歳0ヶ月の幼児が、「ココ」と言いながら円の孔を指さして教えている様子。(図2)



折り紙ができないけど、自分で作ろうとしている友達に対して、あなたならどうするのかを子どもに尋ねている図版の一枚。(図3)

眺めていたりします。このようなコミュニケーションの困難さを支援するため、多くの実践家・研究者がかかわってきました。私もその一人です。

従来の子ども観・障害観にとらわれない

私は、自閉症の子どもが他者に対して、いつごろ・どのように教えるのかという教示行動の発達を研究のテーマにしています。これまでの自閉症研究は、その障害や問題行動の多さゆえに、「できなさ」を見ることで障害の本態を明らかにしようとしたり、生活スキルをどのように教えるのかといった支援に関するものが主流でした。しかし、このような研究の背景には、自閉症児を「できないので教えない」として見られる子ども観・障害観があるように思います。もちろん、自閉症の子どもたちの障害の解明や支援方法の研究を進めることは必要です。しかし、それ以外にも、「教えられる」存在ではなく「教える」存在として、自閉症の子どもたちの肯定的な側面を見ていくことも重要ではないでしょうか。特に、人間関係の中で「主役」となれるような「教える」能力が、彼らの世界を豊かにしていくうえで重要になるのではないかと考え、実証的な研究を進めています。

「教えられる」存在から「教える」存在としての自閉症へ

一例として、自閉症児は、いつから他者に教えることができるのかという教示行為の発達の起源について、研究を紹介します。具体的には、他者が簡単なパズルを解けない場面を子どもの前で提示し、その後の様子を観察しました。すると、健常児の場合、1歳半ころから、相手が解決できない問題に対して、指差しなどで教えるようになることが明らかになりました(図2)。一方、自閉症の子どもの場合、教示行為の生起時期は健常児に比べると遅れるものの、発達の的に3歳以降からみられることが明らかになりました。

また、一方で、相手の知識や技術の向上を考慮してあえて「教えない」という、いわば「教えないという教え方」ができるかどうかについても研究を進めています。例えば、友達が紙飛行機を作ることができないが徐々にできている状況を紙芝居形式で提示しました(図3)。その結果、健常児の場合、小学校4年生ころから「あえて教えない」行動をとることが明らかになりました。また知的に遅れのない自閉症児(高機能自閉症児)においても、「教えない」行動をとれることが明らかになりました。ただ、このような行動をとる理由は、健常児と異なり、「ルールだから」といった他者の心的状態を考慮しにくいものでした。

これらの研究結果は、健常児との違いはみられるものの、自閉症の子どもも、教えられるだけでなく、教えることができる存在であることを示しています。

この研究が自閉症児の支援に寄与できること

このような基礎研究は、自閉症の子どもがすぐに何かができるようになったり、問題行動が減ったりするような「役に立つ研究」ではありません。しかし、教示行為の発達に注目することで、自閉症の子どもたちの新たな側面に光をあて、これまでとは異なる支援の可能性を切り拓けるようになるのではないのでしょうか。例えば、障害特性に配慮しつつ、人間関係の中で彼らが意図的にリーダーになるような役割を設定したり、年下の子どもとペアになって学習を進めたりすることで、自閉症児の社会性を豊かにする契機になる可能性が広がります。このように「見えているけれども見えていない」自閉症の子どもの素敵な姿を見つけて、新たな支援の引き出しを準備できるような研究を展開できればと思っています。